

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 鈴木 洋介

所属: 川崎市立田島支援学校

記録日: 2022年 3月9日

キーワード: 文字への興味関心

【対象児の情報】

・学年

中学部2年生

・障害名

◎ウイリアムズ症候群

・障害と困難の内容

【学習面】

○できるようにになりたいという気持ちはあるが、文字の学習に苦手さを感じている。

○長期休業等で学習期間があいてしまうと学習内容を忘れ、自信がなくなる。

○字形が整わない文字があるがひらがなの読み書きができる(2語文程度)。集中できていないときは、文字が抜ける事がある。

○文章を作ると「○○をしました。たのしかったです。」という毎回決まった形になる。

【日常生活面】

○話すことが好きで、休日に家庭であった出来事を自分から「何をした」「どうだった」など簡単な言葉で相手に伝えることができる。簡単な質問や一斉指示に返答したり行動にうつしたりする事ができる。

○語彙が少なく伝えたいことがあっても上手に伝えられないことがある。

・使用した機器に Pad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

・当初のねらい

①日常生活の中で文字に触れる機会を増やし、文字を通して相手に伝えたり考えたりすることができる。文字への意欲を高めながら文字を書く練習と同時にICTによる表出の向上。

②自分が行った出来事を多面的に捉え、文章を構成することができる。

・実施期間

令和3年6月～令和4年2月

・実施者

鈴木 洋介(特別支援学校担任)

・実施者と対象児の関係

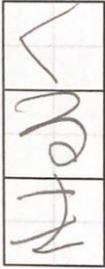
個別学習の担当者

【活動内容と対象児の変化】

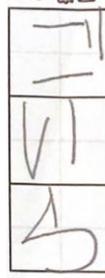
・対象児の事前の状況

○字形が整わない文字があるがひらがなの読み書きができる（2語文程度）。集中できていないときは、文字が抜ける事がある。

「ま」が「き」のような形になる



「り」が「い」と同じ形になる



○文章を作ると「〇〇をしました。たのしかったです。」という毎回決まった形になる。

介入してすぐの活動記録（えにつき）



○休日に家庭であった出来事を自分から「何をした」「どうだった」など簡単な言葉で相手に伝えている。

4月ごろの担任との会話

対象生徒「昨日ゴルフいったよー」

担任「誰と？」

対象生徒「パパとだよー」

担任「何で行ったの？」

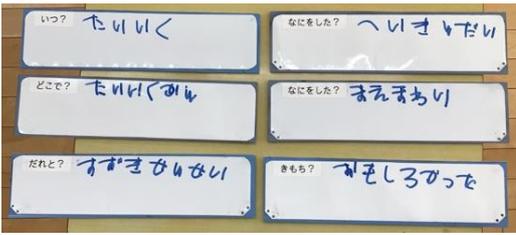
対象生徒「くるまー」

担任「どこでやったの？」

対象生徒「たくさん打つ場所だよ」

日常会話では、聞き手が繰り返し質問することで具体的に理解することができる。

・活動の具体的内容

	活動の写真	活動内容
<p>①活動を振り返る</p> 		<p>▼『カメラ』アプリで日常の活動の様子を記録する。 (基本的には教員が記録をするが、美術で作った作品などは、保護者に見せたいという気持ちが強くあるので自分で撮影している)</p> <p>→文章を作る際に記憶を想起させたり情報を集めたりする。カメラ機能を活用することで、一つの出来事からいろいろな情報を集めることができ、より具体的な文章を作ることができる。</p>
<p>②情報を整理する</p> 		<p>▼情報の収集・整理</p> <p>→情報整理カードを活用して、出来事に対しての情報を整理している。「いつ」「どこで」「だれと」「なにをした」「気持ち」で整理し文章を作る際に活用している。</p> <p>「気持ち」がいつも「たのしかった」で終わることが多いので感情も選択できるようにした。一度使った感情は次の日は選択できないようにした。</p>
<p>③集めた情報から文章を作る</p> 		<p>▼集めた情報から授業の感想文を作り、『えにつき』アプリに記録する。</p> <p>→情報整理カードを活用しながら、教員と一緒に文章を作っていく。様々な文章の構成があることが気づけるように教員が例を提示しながら取り組む。</p>
<p>④日常での活用</p> 		<p>▼『DropStep+ByTalk』を活用し、SNS上で母に日記を送り共有する。</p> <p>→作成した活動記録(えにつき)アプリを送信したり、単身赴任中の母と日常会話のやりとりを行った。</p>

⑤語彙の拡充



▼『PIBO』アプリの読み聞かせ機能で語彙の拡充に取り組む。

→休みに時間に教員と一緒に物語を聞き、教員のあらすじに関する質問に答える学習に取り組んでいる。

→聞きなれない言葉が出てきたときは、イラストと言葉が一致できるようにする。



⑥ひらがな入力の練習



▼『ひらがな めっちゃわかる』アプリの活用

→ひらがな入力の練習として活用している。

→文章作成をしていく中で助詞（で・に・を・は）の学習に取り組んでいる。

→清音で構成された単語をカタカナで入力する学習についても少しずつ取り組んでいる。



・対象児の事後の変化

①メール機能を活用した母とやりとり【DropStep+ByTalk】

授業で取り組んだ内容を保護者に伝えたり、メール機能を活用し大阪に単身赴任中の母と連絡を取ったりすることで、文字で他者とやりとりができることを実感している。

「えにっき」アプリで作った学習の記録を送信する事に加えて母と日常会話のやりとりを行っている。母からのメールを確認する昼休みを楽しみにしている様子があり、「おおさかゆきだいじょうぶ？」や「うわばきにあなあいた」など伝えたい内容を自分なりに考えられるようになっている。

母がメールで送る文章はひらがなのみからはじめ、少しずつカタカナを混ぜて送ってもらうことでカタカナができるようになりたいと自分から伝えてきた。『ひらがな めっちゃわかる』のアプリを行う際、自分でカタカナモードに切り替えて行ったりカタカナの宿題に取り組んだりすることがあった。



②情報整理カードを活用した文章作成【えにっきアプリ】

実施の初期は「△△をしました。たのしかったです。」といった文章の構成だったが情報整理カードを活用して出来事に対する情報を整理することで具体的に文章を作れるようになってきている。集めた情報から分譲を構成していくことは、手がかりを示すが必要であるが、母に学校でのできごとを伝えたいという気持ちが強くなり、回数を重ねる毎に記載する内容が具体的になった。楽しかったことだけでなく、学校で起きた嫌なできごとも文章にして伝えるようになってきている。

③【ひらがなめっちゃわかる】アプリの活用

当初は、読み書きにおいて拗音、促音に関してつまずきが見られた。読むことに関しては、アプリやひらがなブロックを活用した学習を通して間違えることが少なくなっている。書く事に関しては、促音は、正しく書けているが、拗音に関しては、まだ自信がない様子が見られる。また、アプリ内で2語文の作成を行い、助詞の使い方についても取り組んだ。2語文で活用する助詞に限りがあるので、幅広い場面での助詞の活用方法までは、学習できなかったが、部分的な助詞を活用する経験を積むことができた。「えにっきアプリ」で文章を作成する際も、自分で助詞を選択して、文章を作成している様子が見られた。助詞の選択で悩んだときは、教員が選択肢を用意して、それぞれで文章を読み上げ正しい選択肢を選ぶようにした。



④語彙の拡充【PIBO】

読み聞かせ機能で語彙の拡充に取り組んだ。PIBOアプリを活用した語彙の拡充については、成果が分かりやすいように感情語や動作語に焦点を当てて実施した。物語で主人公の感情が変化する絵本や動作を表す言葉が出てくる絵本で取り組んだ。対象場面で、音声言語とイラストを一致させながら読み進めていくことで言葉の理解を深めたり、新しい語彙を獲得したりすることができた。

また、同じ本を数日間続けて読むことで、復習を行うことができた。物語を読み終えたときに教員が「この場面は、どんな気持ちかな？」と教員が質問するとスムーズに答えられることができた。

・当初のねらいに対する評価

- ①ICTを活用して生活の中で文字を活用する場面を設定(DropStep+ByTalk)することで、文字を通して相手とコミュニケーションを図ることができることに気づいてきている。また、文字を実際に活用することで介入前よりも書くこと読むことに関する学習に集中して取り組んでいる。
- ②出来事に対して教員と一緒に情報を整理することで、様々な情報が入った文章を作れるようになってきている。えにっきの取り組み以外でも「おおさかゆきだいじょうぶ？」や「うわばきにあなあいた」のように伝えたい内容が具体的になってきている。

【報告者の気づき】

・気づき①【文字を書く、入力する】

介入前の書く学習や文字入力に関しては、成功体験が少なく自信が持てず意欲的に取り組む様子ができずにいた。「ひらがなめっちゃわかる」で文字の並べ替えからはじめ、少しずつ選択肢を増やす形で実施した。また、書くことに関しては、入力でできた単語を中心に実施した。難易度を少しずつ上げていくことで成功体験を重ねることができ自信がついてきた。

・気づき②【文字を書く、入力する】

介入当初は、相手に文章を書く際「〇〇をしました。たのしかったです。」というパターン化された文章が多かった。撮影した写真をもとに情報を整理して具体的に伝えることで相手にとって分かりやすい文章になることに気づいた。

・気づき③【ICTを活用したコミュニケーション】

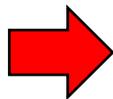
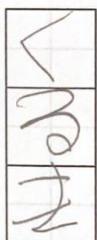
介入前は、文字が活用できるものではなかったが、「DropStep+ByTalk」のメール機能で母とコミュニケーションを取り、文字を通して相手に自分の気持ちを伝えることができることを実感していた。

【エビデンスとなるエピソード】

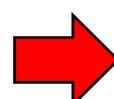
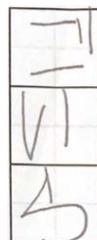
・エビデンス①【文字を書く、入力する】

文字入力や書く学習に取り組む際、以前は一文字ずつ正誤を確認していたが、現在は、拗音の部分での確認はあるが回数は減っている。書くことに関しても集中して取り組む様子が増えている、字の形もきれいになってきている。

「ま」が「き」のようになる



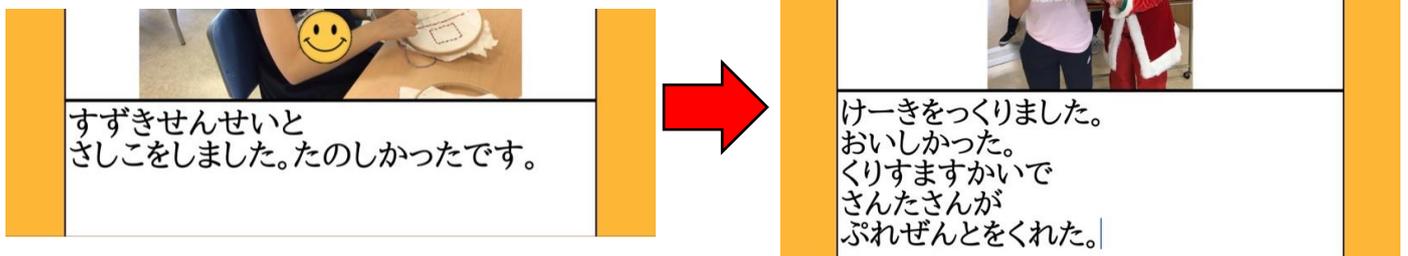
「り」が「い」と同じ形になる



・エビデンス②【文字を書く、入力する、ICTを活用したコミュニケーション】

授業が終わった際に母に伝えたい内容を自分なりに情報を整理して「明日の校外学習が不安って伝えたい」や「体育で平均台と前回り(前転のこと)やったよって伝える」など具体的に教員に伝えることができていた。伝えたい内容を個別の学習の時間「えにっき」に入力して文章を作ることができるようになってきている。

自分が送ったメールに対して母から返信が来るのを楽しみにしている様子が見られた。自分の送った内容に返信が来ると嬉しそうな様子があった。メールの返信を期待する様子も見られて、本人にとって楽しい活動になっている。



・エビデンス③【日常会話】

最近あった給食前の担任との会話

対象生徒「今日魚だね」

担任「あれ？魚嫌いじゃなかったっけ？」

対象生徒「嫌いなのは、鮭だよ」

担任「そうなんだね」

対象生徒「鮭は骨が多いし、しょっぱいから嫌い。これは食べられる」

このエピソードは、話していて説明が具体的にできていた。常にこのような内容になっているわけではなく、日常生活の場面で話形が広がっているなど感じるが増えてきている。

日常会話に関しては、今回の取り組みの成果と断定することはできないが、学年所属の先生も話が上達したと感じている。